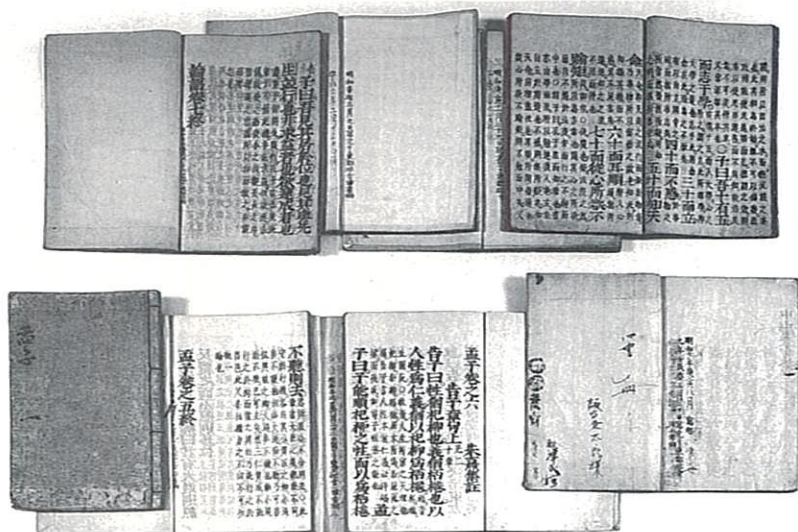


新収蔵資料紹介

「論語・孟子・中庸」

9冊

浦上玉堂筆



ここに挙げた資料は、浦上玉堂（1745-1820）自身の書写になる儒教の基本経典（論語4冊・孟子4冊・中庸1冊）で、若き日の玉堂が儒学を学んだことを伝える貴重な資料である。

浦上玉堂は岡山出身の文人画家で、姓は紀、名は弼、字は君輔、通称は兵右衛門、号は穆齋のち玉堂琴士と称した。岡山藩の支藩備中鴨方藩士の家に生まれ、7歳で家督を相続し、16歳の時に1歳年長の藩主池田政香の側近として仕えて重用された。明和4年（1767）、23歳の時には御前御奉具御奉行に任ぜられ、翌明和5年には御留役を仰せつかるが、この年藩主政香の死去にあう。

そうした時期の浦上玉堂の姿を伝えるのが、これらの資料である。書体および、中に書き込みが無いことから、書籍として作成するため、版本を写したものと推測される。冊子の奥には、次のような玉堂自筆の奥書がある。

論語一 「明和庚寅冬十月七日寫完 于東都 弼(後欠)」

論語二 「明和庚寅十一月二十九日寫書于東都邸舎」

「乙未二月十六日句讀了」(朱書)

論語三 「明和辛卯春正月二十九日寫于東都客館」

論語四 「明和辛卯三月九日寫完于東都邸舎 浦上孝弼」

「安永六年二月十三日句讀了」(朱書)

孟子一 「明和辛卯四月朔旦寫了于東武邸舎」

孟子二 「明和辛卯夏六月二十二日寫了于東武邸舎

浦上孝弼」

「安永六年仲春二十二日句讀了」(朱書)

孟子三 「明和辛卯九月二十日完于東都邸舎 浦上孝弼」

孟子四 奥書なし

中庸一 「明和七年庚寅八月 寫起

九年壬辰春三月二十日寫完 于東都邸舎 浦上孝弼」

「安永戊戌之冬句讀了」(朱書)

以上の奥書から、明和7～9年（1770～72）に20歳代後半の玉堂によってこれら儒教の四書（大学を欠く）が鴨方藩の江戸藩邸で写された経緯や、読まれた様子が判明する。

玉堂が、春琴・秋琴の二子連れで脱藩したのが50歳のとき。画人としての彼をみる場合、その生涯の前半生を50歳以前・後半生をそれ以後と分けることが多い。充実した制作活動を行った後半生を物語る資料は数多く残されているが、その前半生については不明な点が多い。画技は30歳ごろから始めたらしく、谷文晁らと交際もあったようだが、師承関係も明らかでない。後に名を成した画業ですら、そのような状況であるから、ましてや武士本来としての玉堂のすがたを察するのは困難である。そうした意味からも、このような彼の若い時期を伝える資料は貴重であるといえよう。

特別展

技術と暮らし

10. 21~11. 19

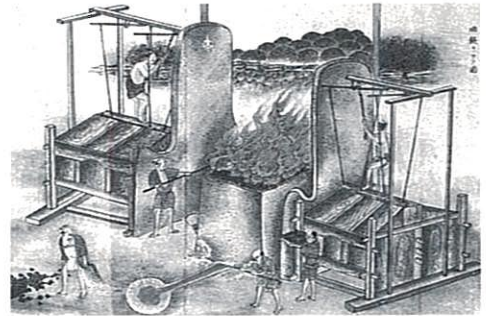
私たちの社会は、技術革新の積み重ねによって発展してきた。それは、各時代の人々がよりよい暮らし、より豊かな社会を求めた結果であり、このより豊かな生活を求める努力こそ、社会発展の原動力であったといえよう。

新しい技術がすぐに民衆の暮らしを豊かにしたとは考えられない。多くの場合、新しい技術は支配者の所有に帰したであろう。しかし、それは確実に社会を変え、人々の暮らしを豊かにしていったと思われる。

現在の私たちの暮らし・社会を支える各種の技術は、人類発生以来、私たちの祖先が営々として築いてきた技術革新の積み重ねの上に成り立っているのである。

本年度特別展は、『技術と暮らし』と題し、「鉄と社会」・「織物技術の発達」・「焼物の歴史」・「技術の断面」・「西洋文明との出会い」の5つのテーマで構成した。

なお、会期中の10月28日(土)には京都川島織物史料室主任高野昌司氏による「上代織物の復元について」と題する講演会を開催した。



「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」のうち鑪工程 東京大学

焼物の発達と生活

- 泉福寺洞穴出土豆粒文土器片 佐世保市博物館島瀬美術センター
- 染付芙蓉手蓮池水禽図皿(景德鎮) 佐賀県立九州陶磁文化館
- 染付楼閣山水文大鉢(初期伊万里様式) 〃
- 染付皿山職人尽し絵図大皿(古伊万里様式) 有田陶磁美術館
- 色絵唐花文皿(鍋島様式) 佐賀県立九州陶磁文化館
- 色絵三瓢文皿(鍋島様式) 〃

技術の断面-わる・ひく・けずる・とぐ-

- 山木遺跡出土の生産生活用具 静岡県韭山町教育委員会
- 紙本着色 松崎天神縁起(室町期写本) 山口 防府天満宮
- 紙本着色 春日権現験記絵(模本) 東京国立博物館
- 数珠製作用具 近江八幡市郷土資料館
- 土佐豊永郷および周辺地域の山村生産用具 高知県大豊町教育委員会
- 刀剣研ぎ道具 個人

西洋文明との出会い

- シーボルト名刺 長崎市立博物館
- シーボルト関係資料 外科医療器具 長崎県立美術博物館
- 出島絵巻物 長崎県立図書館
- 長崎新聞 長崎市立博物館
- 長崎ガラス絵「紅毛人逍遥図」 長崎県立美術博物館
- 人体模型 ド・ロ神父記念館
- 本木昌造像 長崎県立図書館
- 長崎港写真(出島を望む居留地) 〃

主な出品物

- ◎重要文化財
- 県指定重要文化財

鉄と社会

- 板井砂奥製鉄遺跡4号炉 総社市教育委員会
- 周防国・尾張国正税帳(正倉院文書)複製 国立歴史民俗博物館
- ◎鉄製厨子 付銘板 鳥取 大山寺
- ◎宗像神社沖津宮祭祀遺跡出土品 福岡 宗像大社
- ◎東寺百合文書のうち
 - 新見庄惣検作田目録 京都府立総合資料館
 - 新見庄田所金子衡氏注進状 〃
 - 鬼の釜 総社市新山(管理)
 - 先大津阿川村山砂鉄洗取之図 東京大学
 - 大鉢製造方図屏風 佐賀 佐嘉神社

織物技術の発達

- 登呂遺跡出土 機織具 静岡市立登呂博物館
- 伊場遺跡出土 織機部品 浜松市博物館
- ◎神宮古神宝類のうち
 - 金銅高機 杼付 三重 神宮
 - 七十一番職人歌合絵巻 東京国立博物館
 - 結城紬織り 地機 浜松市博物館



展示室風景

テーマ展

護国山曹源寺

7. 19～8. 20

曹源寺は、岡山市円山の正覚谷にある臨済宗寺院で、山号は護国山。元禄11年(1698)、岡山藩主池田綱政によって創建された。五千余坪に及ぶ広大な境内には、総門・仏殿・鐘楼・三重塔などの伽藍を配し、備前第一の禅院としての格式をとどめている。仏殿の背後には、綱政以降の歴代藩主を葬った池田家墓所があり、また表書院の東に広がる回遊式庭園は優れた禅宗庭園として知られ、現在、寺域全体が県指定史跡になっている。



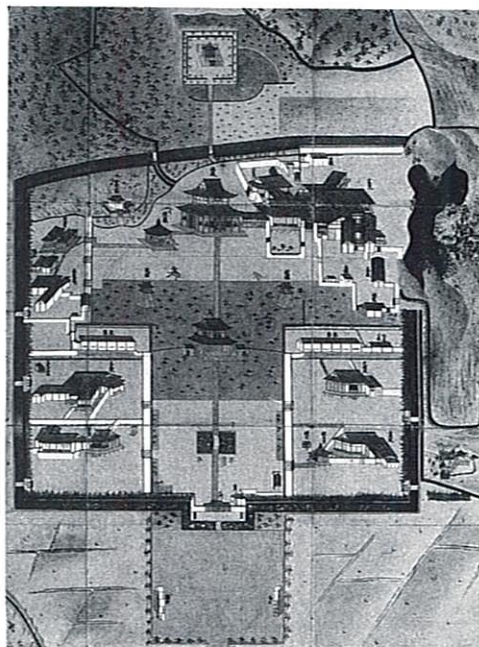
開山絶外和尚頂相

さて、池田家の菩提寺という関係上、同寺には綱政以後の歴代藩主の肖像彫刻、藩主自筆の絵画や書跡、また歴代住職の頂相や藩の御用絵師の作品など、貴重な資料が多数伝来している。

この展覧会では、膨大な歴史資料の中から約50点を展示し、曹源寺の歴史と同時に伝わる宝物を紹介した。特に、画技に優れた綱政・継政などが描いた絵画や、光政・綱政自筆の「法華経二十八品和歌」には、文化面への造詣が深かった歴代藩主の側面がうかがわれた。



絶外和尚招請状



護国山曹源寺境内図

主な展示資料

開山絶外和尚頂相	1幅	元禄9年(1696)
絶外和尚招請状	1幅	元禄11年(1698)
開山国師関山慧玄頂相	1幅	山口雪溪筆
護国山曹源寺境内図	1鋪	宝永5年(1708)
池田綱政寺領寄進状	1通	元禄11年(1698)
池田綱政坐像	1軀	
池田信輝画像	1幅	享保11年(1726)
雲中関羽図	1幅	池田継政筆
文殊大師図	1幅	池田宗政筆
十六羅漢図	4幅	狩野周信・岑信筆
陶淵明愛菊図・山水図	3幅	狩野守則筆
沢庵和尚掃洛日誌	1巻	江戸時代初期
阿弥陀諸菩薩図	1幅	嘉靖41年(1562)



池田綱政坐像

テーマ展

逸見東洋

平成2. 1. 5～2. 4

明治の岡山県を代表する工芸家としては正阿弥勝義、逸見東洋が双璧である。勝義は刀装具から出発し、東洋は刀剣鍛冶から出発した。しかしいずれも明治9年(1876)の廃刀令を境に転機を迫られた。多くの職人が行き詰まり、廃業した中で、2人は独自の方向を見いだした。勝義は花瓶・香合などの金工に専念した。一方東洋はすでに天下に名を轟かせていた刀工の道を捨て、生来の器用さもあって、木彫・竹彫・堆朱・堆黒・堆白へと芸の世界を広げ、万能的活躍で不動の地位を築いた。逸見東洋の先祖は代々金光町上竹にあったが、東洋は弘化3年(1846)に岡山市下之町に生まれた(大正9年没)。逸見東洋は本名を大吉、号を東洋という。文久2年(1862)京都に出て、刀工天龍子正隆の弟子となって修行した。元治元年(1864)岡山に帰って、鍛刀を始め、瞬く間に全国にその名を知られるようになったが、廃刀令で廃業。羽黒神社(倉敷市玉島)への奉納太刀は26才の作品であるが、尋常ならざる最後の逸品として光っている。それからは金工家の正阿弥勝義に師事し、彫金技術を修得し、また木竹彫においても高い技術を習熟し、独自の道を極めた。一方漆芸においてはその技も堆朱、堆白にまで及び、精緻な技術は他の追隨を許さない域に達した。

これまで、勝義についてはテーマ展をはじめ色々な企画でとりあげた。

しかし東洋についての企画は、作品が散らばっていることもあって、実現に至らなかった。今回この東洋について企画し、彼の作品を通して、激変する明治と闘い、その時代を駆け抜けた気性激しくも、孤独だった天才東洋の技術と、彼の芸術の真髄を知ってもらい、忘れかけられている彼を顕彰するとともに、明治とその前後の時代的特質を知ってもらう機会とした。出品点数67点。



風神雷神図堆朱盆

明治44年(東洋66歳)
林原美術館蔵



蟾螂図茶盒
大正9年(75歳)本館蔵

渡河蛙蟾螂蜂図煙草煙管入



花鳥山水図鶯篋収納箱



玉堂富貴之図大座卓

明治18年(40歳)

企画展

岡山県指定重要文化財 I

平成 2. 2. 8 ~ 3. 11

昨年度までの巡回展にかわるものとして今年度から企画展が開催されるはこびとなった。

最初の企画展は、県指定の有形文化財(主に美術工芸品)の中から、公開可能な38件を一堂に会し、紹介した。

出品目録

- | | | | |
|----|---------------|-------------|----------|
| 1 | 石枕 | 古墳時代前期 | 岡山県立博物館 |
| 2 | 木造 女神像 | 平安時代中期 | 個人 |
| 3 | 木造 狛犬 | 平安時代後期 | 津山市 高野神社 |
| 4 | 木造 聖観音坐像 | 11世紀初頭 | 勝山町 明徳寺 |
| 5 | 木造 葉師如来坐像 | 12世紀後半 | 総社市 明光寺 |
| 6 | 木造 阿弥陀如来坐像 | 鎌倉時代前期 | 和気町 安養寺 |
| 7 | 絹本着色 文殊・普賢菩薩像 | 鎌倉時代初頭 | 井原市 智勝院 |
| 8 | 木造 仏頭 | 鎌倉時代 | 倉敷市 宝島寺 |
| 9 | 木造 不動明王立像 | 鎌倉時代 | 芳井町 成福寺 |
| 10 | 絹本着色 両界曼荼羅図 | 鎌倉時代 | 笠岡市 持宝院 |
| 11 | 金銅板貼 山伏笈 | 室町時代 | 鏡野町 円通寺 |
| 12 | 絹本着色 宇喜多能家像 | 室町時代後期 | 岡山県立博物館 |
| 13 | 絹本着色 妙向尼画像 | 江戸時代初期 | 個人 |
| 14 | 世界図屏風 | 江戸時代前期 | 御津町 妙覚寺 |
| 15 | 絵馬 おかげ参りの図 | 文政13年(1830) | 牛窓町 牛窓神社 |
| 16 | 梵鐘 | 建長4年(1252) | 御津町 妙覚寺 |
| 17 | 磬 | 弘安8年(1285) | 牛窓町 弘法寺 |
| 18 | 鰐口 | 正平18年(1363) | 中央町 両山寺 |
| 19 | 鰐口 | 永徳3年(1383) | 備中町 観音寺 |
| 20 | 鰐口 | 応永11年(1404) | 落合町 清水寺 |
| 21 | 舞楽面 | 13世紀 | 八束村 福田神社 |
| 22 | 木造 追儺面 | 康安2年(1362) | 柵原町 本山寺 |
| 23 | 木造 鬼面 | 室町時代 | 和気町 安養寺 |
| 24 | 木造 獅子頭 | 南北朝~室町時代初期 | 落合町 熊野神社 |
| 25 | 木造 獅子頭 | 延徳2年(1490) | 勝山町 別当寺 |
| 26 | 木造 獅子頭 | 天正20年(1592) | 落合町 天津神社 |
| 27 | 木造 鼻高面 | 天正20年(1592) | 落合町 天津神社 |
| 28 | 木造 獅子頭 | 貞享2年(1685) | 中央町 八幡神社 |
| 29 | 紙本着色 金陵山古本縁起 | 永正4年(1507) | 岡山市 西大寺 |

- | | | | |
|----|-------------------|------------|------------|
| 30 | 紙本淡彩 神事絵巻 | 室町時代 | 岡山市 吉備津彦神社 |
| 31 | 紙本墨書 吉備津宮法楽連歌(発句) | 応永8年(1401) | 岡山市 吉備津神社 |
| 32 | 紺紙金字 法華経 | 12~13世紀 | 山陽町 千光寺 |
| 33 | 太刀 銘宗貞 | 鎌倉時代 | 個人 |
| 34 | 太刀 銘雲生 | 鎌倉時代末期 | 御津町 |
| 35 | 宝剣 銘祐定 | 寛文9年(1669) | 備前市 鏡石神社 |
| 36 | 黒韋威鎧 大袖付 | 南北朝時代 | 牛窓町 五香宮 |
| 37 | 宇野津焼 染付鉢 | 嘉永5年(1852) | 個人 |
| 38 | 虫明焼 真葛作楠溪下絵染付手付樽 | 江戸時代末期 | 個人 |

博物館講座

恒例となった『博物館講座』を、下記の内容で実施した。本講座は「岡山県の歴史と文化」をテーマに、外部の専門家や本館学芸員を講師とし、館蔵の実物資料を活用しながら郷土の文化遺産を理解しようとする講座である。本年度は外部講師の方々に、美作の古代のすがた、本陣石井家の豊富な資料からみた近世矢掛宿のようす、近世における瀬戸内屈指の港町下津井の賑わいについて御講義いただき、時代・地域性・内容ともにバラエティ豊かなものとなった。受講者数は68名で、学習内容と日程は以下のとおりであった。

テーマ	講師	開催日
古代の吉備と大和	副館長 高橋 護	6月2日(金)
木簡からみた古代の美術	津山郷土博物館学芸員 淡 哲夫	"
岡山 の 面	主事 八田 眞	6月9日(金)
備前焼の歴史	学芸員 白井 洋輔	"
浦上玉堂	学芸員 守安 収	6月16日(金)
瀬戸内の海運	学芸員 竹林 栄一	"
中国産地の産業史	主任 田村 啓介	6月23日(金)
山陽道と矢掛宿	岡山大学附属図書館員 中野美智子	"
仏教美術における装飾	学芸員 中田利枝子	6月30日(金)
下津井港	倉敷市本荘公民館長 山本 慶一	"



平成元年度 博物館講座より

平成元年度購入資料

- 「論語・孟子・中庸」浦上玉堂筆 9冊
明和7～9年(1770～72)
- 紙本淡彩山水画帖 鳥越烟村筆 1帖 天保12年(1841)
- 柴田義董絵模写下絵 片山信成筆 一括 江戸時代後期
- 絹本墨画 山水図 伊藤花竹筆 1幅 明治9年(1876)
- 絹本著色 惜春図 池田綱政筆 1幅 江戸時代
- 絹本著色 月明図 池田継政筆 1幅 江戸時代
- 逸見東洋作 茶盒 1点 明治時代
- 正阿弥勝義作 螳螂置物 1点 明治時代
- 紙本淡彩 備前岡山州学之図 1幅 江戸時代後期
- 太刀 雲次 1口 南北朝時代
- 槍 忠光 1口 明応3年(1494)

平成元年度寄贈資料

- 三宅氏伝記 ほか 3巻 岡山市 三宅 幸子
- 人見家文書 一括 " 人見 宗利
- 家相図・方位選択書ほか 6点 U. S. A John Cornell
(敬称略)

以上、貴重な資料の寄贈を受けました。永く大切に保管するとともに本館の展示・研究資料として有効に活用させていただきます。ここに御寄贈くださいました方々のご芳名を記入し、厚くお礼申し上げます。

平成2年度事業のお知らせ

○開館20周年記念-

特別展 「邪馬台国へのみち」

平成3年2月～3月

三国志に記載された邪馬台国は、その所在地について、九州説・大和説に分かれ論争が繰り返されたこともあって、日本古代史上の謎としてロマンに満ちた関心を集めている。この展覧会では、邪馬台国をめぐる壮大な歴史の流れを示す各種の遺物を展示し、人々の関心に応えるとともに、そうした時代の流れのなかに「吉備」を位置づけ、邪馬台国時代のすがたを浮き彫りにする。

○開館20周年・テレビせとうち開局5周年記念-

「名兜 百頭展」

平成2年4. 26～5. 27

平安末期から江戸時代までの名兜100展を展示し、日本の甲冑の発展とそれともなう工芸技術の発展の跡をたどる。

○テーマ展「浦上玉堂とその周辺」

平成2年8月の予定

浦上玉堂(1745-1820)は、岡山が生んだ最も著名な文人画家である。彼は、岡山藩の支藩である備中鴨方藩士であり、50歳のとき春琴・秋琴の二子連れて脱藩し、諸国遍歴の後京都に住んだ。画は30歳を過ぎてから本格的に始めたものと思われるが、画人・学者・文人との交友が広く、谷文晁を始めとする画友や儒学者西山拙斎・豪商河本一阿ほか各地の文人との交際が認められ、そうしたなかにおいて玉堂の画風が作られていったと思われる。この展覧会では、玉堂の作品及び彼を取り巻く人々との交流を物語る文書類を中心に展示を行い、玉堂の作風と形成についてみてゆく。

○企画展「岡山県指定重要文化財Ⅱ」

平成2年10月～11月の予定

岡山県は古くから吉備の国として栄え、長い歴史の過程で独自の文化を形成し、現在まで数多くの文化財が伝えられている。この企画展は、昨年度にひきつづき岡山県指定の有形文化財(美術工芸品)を一堂に集め、広く一般の人たちに郷土の歴史や文化を紹介しようとするものである。

○テーマ展「岡山の農村芸能」

平成3年1月の予定

それぞれの地域の寺社の祭礼と結びついて展開された様々な農村芸能は、民衆の生活と密着したものであり、また娯楽の少なかった農山村にあっては、民衆のエネルギー発散の場でもあった。県下にも、美作の横仙歌舞伎・備前の面浄瑠璃・備中の神代神楽など今なお伝承されているものが多い。この展覧会では、こうした農村芸能にみられる民衆の活動的な姿を紹介し、郷土芸能への認識を深める機会を提供する。

○博物館講座「岡山県の歴史と文化」

平成2年6. 1～6. 29
各金曜日の5日間

岡山県立博物館だより No.34

発行日 平成2年3月31日
発行者 岡山県立博物館
館長 橋本泰夫
岡山市後楽園1-5
☎(岡山)72-1149